

1. 瀬戸内の人文景観の特徴と保全

(1) 令和時代の故郷再発見（ディスカバージャパン）と瀬戸内の人文景観

JR 岡山駅で「瀬戸の花嫁」のメロディーを聞かされたときに多島美の風景が思い出され、郷愁に駆られる。岡山に住んだのはわずか2年間であったが、蘇る光景は「ふるさとの海」のようで不思議と懐かしい。小柳ルミ子さんのこの歌が発売されたのは今から約50年前、昭和47(1972)年のことである。

戦後、日本は右肩上がりの成長を続け、昭和43(1968)年にはGNP世界第2位の経済大国となった。そして、昭和45(1970)年には“人類の進歩と調和”がテーマの大阪万博が成功裡に終わり、わが国の経済は絶頂期を迎えた。栄華はいつまでも続くものと感じられた。一方で、日本の経済を四大工業地帯とともに支えてきた瀬戸内海は汚れ、自然の海岸はなくなっていった。赤潮が各地で発生し、埋立てが進んだ。「瀬戸内海環境保全特別措置法」の前身である「瀬戸内海環境保全臨時措置法」が制定されたのは昭和48(1973)年、丁度、この頃である。

そしてまた、当時の国鉄による昭和の「ディスカバージャパン」のキャンペーンが展開されたのもこの時期であった。昭和のディスカバージャパンは「旧来の名所や観光地をまったく意識させないことで、逆に新しい旅行需要をつくり出し、国内旅行先の再開発の役割を果たした¹⁾」。若い女性を中心とする新しい大きな動きは、各所に残る日本の良さを見つめ直す契機となった。振り返ってみると、貿易によりグローバル化が進んだ時代であって、あたかも一方に振れ過ぎた振り子の揺り戻しのように思えてくる。

昭和から平成への時代、バブル経済絶頂の頃、「ふるさと創生事業」が当時の竹下登・内閣総理大臣の発案で行われた。この時も地方に目が向けられた。ふるさとの良さを見出す地域の知恵や工夫が求められた。

今、わが国はコロナ禍の真っ只中にある。令和の時代を迎え、一年も経たないうちに新型コロナウイルス感染症との闘いに巻き込まれた。2020年当初、中国で広がりを見せたこのウイルスはグローバルの極致ともいえる時代のなかで世界的に広がっている。「ウイズ・コロナ」「アフターコロナ」の時代においていかに生活をしていくべきか「新しい生活様式」が求められている。新生活では「コロナを止めるか経済活動を止めるか」の二者択一ではなく、コロナ禍の状況に順応した経済活動が求められる。一方のみの選択の先にはヒトも経済も悲惨な結果しか待っていない。当然、経済活動のひとつ・観光のあり方も変革が必要となっている。

こうした状況下、「マイクロツーリズム」²⁾が注目され始めている。「マイクロツーリズム」とは1時間圏内の地元観光客に着目するツーリズムの新しいあり方である。提唱する星野リゾートの星野佳路代表は、観光需要回復の第一段階として、これに期待する。何より「近場の観光」は地元の人々による地元の良さを掘り起こしの機会となるだろう。今回、瀬戸内海環境保全協会の会員自治体から景観に関する多数の情報が寄せられた。ひとつひとつが本シリーズのテーマ「瀬戸内における水環境を基調とする海文化」における「瀬戸内の日々の生活に根ざした身近な景観と保全の取り組み」を意識したものであり、提供された方々思いの詰まった人文景観である。瀬戸内には古代、中世、近世、近代、そして現代と、各時代の特色のある人文景観があふれている。西田正憲は『瀬戸内海の発見』のなかで次のとおり具体的に示す。

「先土器、縄文、弥生時代遺跡から、古代の古墳と山城、国府跡、国分寺跡、中世の水軍遺跡（海城、山城）と合戦場跡、古代、中世、近世を通じて発展する神社仏閣と港町、近世の城郭、農漁村集落、さらには瀬戸内海に特徴的な段々畑や傾斜畑、養殖塩田跡、石切場、そして近代の洋式灯台、軍事遺跡、精錬所、現代の工業地帯、長大橋、



対潮楼から仙酔島を眺める（広島県福山市鞆の浦）

タワー、…海洋レクリエーション関係のリゾートホテル、マリーナ、浮体構造物、釣り桟橋、人工海浜等々…一方で、江戸後期になって、日本人はようやく歌枕的名所の風景からの離脱をはじめ、紀行文に遠景の俯瞰景の記述が目立つようになると瀬戸内海をひとつのまとまった地域と捉えるようになり、いくつかの灘は内海、そして美しい多島海として理解されるようになった。」³⁾

日本人は瀬戸内海の新しい風景を発見し、定着させていったのである。それは人文景観と自然景観が一体となったものであった。そ

して、一体となり調和した景観は瀬戸内海国立公園の誕生へと導いた。人文景観とは、一言で言えば、「時間と空間のなかで人々の日常や営みから紡ぎ出される景観」である。そうした身近な場所で「はっ」とする景観の発見、すなわちふるさとの再発見のひとつひとつがこれからの瀬戸内の可能性をさらに広げていくと考えられる。この一連の過程こそが令和時代の故郷再発見（ディスカバージャパン）といえるであろう。

（2）瀬戸内の身近な人文景観

人文景観をより具体的に示すと、家や町並みに代表される人文景、日常生活や行事などで出会う生活景、農林水産鉱工業が作り出す産業景が主なものである。これらを少し整理し、今回、瀬戸内の日々の生活に根ざした身近な景観（以下「身近な景観」という）として、(1)農林漁業景観、(2)商工鉱業景観、(3)交通運輸景観、(4)建築・町並み景観、(5)その他の景観（生活の風景等）の5つに区分して、情報が提供された。この5区分に沿って以下に特徴を抽出する。

・(1)農林漁業景観

農業景観では傾斜地と利用した棚田や段々畑に関するものが7か所（④と⑤は後述、「⑧柑橘の段々畑」（広島県呉市）、「⑨鹿島の段々畑」（広島県呉市）、「⑫狩浜の段畑（愛媛県西予市）、「⑬遊子水荷浦の段畑」（愛媛県宇和島市）、「⑭等覚寺地区の棚田」（福岡県京都郡苅田町））が集まった。この7か所のうち「⑤下津町方の段々畑」と一体的に形成されているといってもいいのが、2019（平成31）年に日本農業遺産に認定された「④下津蔵出しみかんシステム」（和歌山県海南市）の景観である。石積みした傾斜地を利用したみかん畑の景観である。糖と酸味を微妙なバランスとするため、畑地に設けた土蔵でみかんを熟成させてから出荷するのが「蔵出しみかん」である。山頂などには雑木林を残して土砂流出を防ぎ、急傾斜地ではびわを栽培し地形に順応した農業を行い、里地里山の生物多様性を維持した持続可能性の高い農業システムとなっている。次に花を楽しめる農業景観として、「②綾部山梅林」（兵庫県たつの市御津町）と「⑦赤崎海岸のじゃがいも畑」（広島県東広島市）の2か所の提供があった。前者は「ひとめ2万本」といわれる約24ヘクタールの梅林で農業構造改善事業の成果として生まれたものである。後者のある安芸津町の木谷・赤崎地区は、明治末期からジャガイモの栽培が盛んな所として地元では有名である。

「赤馬鈴薯」として知られるジャガイモは、レンガづくりにも用いられた赤い土が生み出している。農業に関連するものとして2か所の情報があつた。降水量が少ない瀬戸内地方では、ため池が水がめとなって農業を支えてきた。「①加古大池」(兵庫県加古郡稲美町)は、兵庫県最大のため池であり、満水面積は約49ヘクタールを誇るものである。そして干拓による新田開発の地に残る「⑪周防灘干拓遺跡」については、2(1)では代表して一つを紹介しているが、山陽小野田市高泊にある高泊開作浜五挺唐樋と山口市名田島にある名田島新開作南蛮樋の2か所からなる。いずれも江戸時代に萩藩によって行われた干拓の様子を現代に伝える貴重なもので1996(平成8)年には国の史跡となった。農林水産省のHPによれば「唐樋とは、汐の干満作用により自然開閉する構造をもった樋門…。樋門は幅10.81m、総高6.18mで、現在の新しい樋門が建設されるまで、300年以上にわたって機能」「名田島新開作南蛮樋は、山口市の榎野川の河口部にあり、…潮の干満で自然開閉する唐樋に対して、人力によって板を上下に動かして水の動きを調節」とある。いずれも現在、樋門としての機能は失われているものの当時の土木技術を色濃く残す貴重なものとなっている。

漁業からはカキ小屋を含めてカキ関連のものが3か所(「③牡蠣の養殖景観」(兵庫県赤穂市)、「⑥虫明湾のカキ筏」(岡山県瀬戸内市)、「⑩簗島カキ小屋」(福岡県行橋市))、そしてアサリ関連のものが1か所(⑩後述)、残る1か所は魚市場(「⑮簗島魚市場」(福岡県行橋市))である。カキの養殖景観は瀬戸内海を代表する漁業景観であろう。広島県はカキ類養殖生産量日本一を続けているし、岡山県、兵庫県も上位に食い込んでいる。多くの人に親しまれている風景である。集まったものの中で特に目を引くものが「⑩大野のあさり畑」(広島県廿日市市)である。大野瀬戸の向こうに宮島を望む大野の干潟に作られている畑である。干出時には、杭で升目に仕切られたあさり畑の景観が出現する。

・(2) 商工鉱業景観

商業景観としては、まず「①明石・魚の棚」(兵庫県明石市)、「⑤五味の市」(岡山県備前市日生町)、「⑩宮島表参道商店街」(広島県廿日市市)の商店街2か所、市場1か所の計3か所が寄せられた。このジャンルでは、その他13か所の情報があり、1か所の鉱業景観(「⑦北木島採石場」(岡山県笠岡市))を除く12か所はすべて工業に関連するものである。うち「②復元塩田の風景」(兵庫県赤穂市)、「③古池塩田の風景」(兵庫県赤穂市)、「④旧日本専売公社建物群」(兵庫県赤穂市)、「⑪三田尻塩田旧越中屋釜屋煙突」(山口県防府市)、「⑫福永家住宅」(徳島県鳴門市)は「塩」関連のものである。そして「⑥水島臨海工業地帯」(岡山県倉敷市)、「⑧レンガ工場(輪環窯煙突部)」(広島県竹原市)、「⑨呉港の旧海軍史跡」(広島県呉市)、「⑬波止浜の造船工場群」(愛媛県今治市)、「⑭苅田町工場夜景」(福岡県京都郡苅田町)、「⑮沿岸部工場夜景」(大分県大分市)、「⑯造船所の進水式」(大分県佐伯市鶴谷町)は工場や造船所が生み出す景観であり、特に工場夜景は今の時代に評価を高めているホットな景観である。

・(3) 交通運輸景観

ここでは灯台関連のものとして「①今津灯台」(兵庫県西宮市)、「③雑賀崎灯台」(和歌山県和歌山市)、「⑦大久野島灯台」(広島県竹原市)、「⑮高松港玉藻防波堤灯台(せとしるべ)」(香川県高松市)、「⑯男木島灯台」(香川県高松市)、「⑰関崎灯台」(大分県大分市)と6か所集まった。

港湾は「④宇野港」(岡山県玉野市)、「⑪元宇品海岸」(広島県広島市)、「⑫宮島口地区」(広島県廿日市市)、「⑳西大分港」(大分県大分市)の4か所が寄せられた。

今回、橋梁も多く寄せられている。視点場（見る場）としてだけではなく、中には見る対象としての橋梁も含まれている。「②明石海峡大橋」（兵庫県神戸市・淡路市）、「⑤瀬戸大橋（鷲羽山展望台）」（岡山県倉敷市）、「⑥内海大橋」（広島県福山市）、「⑨安芸灘とびしま海道」（広島県呉市）、「⑩音戸の瀬戸」（広島県呉市）、「⑭大鳴門橋（千畳敷展望台から）」（徳島県鳴門市）、「⑰采島海峡大橋」（愛媛県今治市）である。

道路では「⑧R185 さざなみ街道」（広島県竹原市）、「⑬鳴門スカイライン」（徳島県鳴門市）、「⑱一般県道山内吉富線外」（福岡県築上郡吉富町）の3か所が寄せられている。道路からの流れる景色（シークエンス景観）を楽しむ場として意識されているものである。

ユニークなのは、「⑲航空自衛隊築城基地」（福岡県築上郡築上町）である。航空祭には例年、約5万人が訪れるという。基地が地域に溶け込み、身近な景観となっている証であろう。

・(4) 建築・町並み景観

「寺社・仏閣」では「③おのころ島神社」（兵庫県南あわじ市）、「④住吉神社」（兵庫県明石市）、「⑥伊和都比売神社境内」（兵庫県赤穂市）、「⑧加太春日神社」（和歌山県和歌山市）、「⑨淡嶋神社」（和歌山県和歌山市）、「⑳榊山八幡神社」（広島県東広島市）、「㉔阿波井神社」（徳島県鳴門市）に加えて、「寺社仏閣」「建築物」「集落」の3つの分類にまたがる複合的な「⑩絶景の宝庫 和歌の浦」（和歌山県和歌山市）である。

「建築物」では「①神戸ポートタワー」（兵庫県神戸市）、「⑭むかし下津井回船問屋」（岡山県倉敷市）、「⑮旧柚木家住宅（西爽亭）」（岡山県倉敷市）、「⑲柄酒造」（広島県東広島市）、「㉒三之瀬地区」（広島県呉市）、「㉓海上自衛隊第一術科学校」（広島県江田島市）、「㉗亀老山展望公園」（愛媛県今治市）の情報が寄せられた。

「集落・町並み（含む街並み）」では、「②旧居留地」（兵庫県神戸市）、「⑤坂越のまち並み」（兵庫県赤穂市）、「⑪湯浅町湯浅の町並み」（和歌山県有田郡湯浅町）、「⑫真鍋本浦地区」（岡山県笠岡市）、「⑬下津井の町並み保存地区と干し蛸」（岡山県倉敷市）【注：「⑭むかし下津井回船問屋」は、この保存地区にある】、「⑯鞆の町並み」（広島県福山市）、「⑱たけはら町並み保存地区」（広島県竹原市）、「㉑御手洗のまちなみ」（広島県呉市）、「㉕塩飽本島町笠島重要伝統的建造物群保存地区」（香川県丸亀市）、「㉖「多度津町多度津」の伝統的町並み」（香川県仲多度郡多度津町）、「㉙外泊石垣の里」（愛媛県南宇和郡愛南町）が挙げられた。

「都市」のジャンルでは「㉘貝定展望台」（愛媛県四国中央市）が寄せられてきた。「日本夜景100選」のひとつであり、眼下に広がる夜景を楽しむ展望台である。

「その他」は3か所である。「⑦友ヶ島」（和歌山県和歌山市）は要塞遺跡であり、「⑰尾道駅前の海辺の遊歩道」（広島県尾道市）は、海岸に沿って伸びるウッドデッキ状の遊歩道であり、市民や観光客の憩いの場となっているものである。そして「⑳豊前松江駅」（福岡県豊前市）は建築物としてというよりも視点場としての意味合いが強い。

・(5) その他の景観

このジャンルは前述の(1)から(4)の区分には、なじみにくいものなどが13件挙がっている。大括りで「日々の生活の中での風景」と「行事・慣習・祭事」に区分できる。前者は「①マープルビーチ・タリイサザンビーチの夕陽」（大阪府泉南市）、「③広村堤防」（和歌山県有田郡広川町）、「④下津井の干し蛸」（岡山県倉敷市）、「⑤下津井共同井戸群」（岡山県倉敷市）、「⑥渡船通学の風景（尾道水道）」（広島県尾道市）、「⑦小鳴門海峡の渡船」（徳島県鳴門市）、「⑩浜の宮海岸」

(福岡県築上郡築上町)、「⑪吉富漁港 黒松千本植樹」(福岡県築上郡吉富町)、「⑫湯けむり景観」(大分県別府市)、後者は「②相生のペーロン競漕」(兵庫県相生市)、「⑧櫃石ももて祭」(香川県坂出市)、「⑨瀬居八幡宮の秋大祭(船渡御)」(香川県坂出市)、「⑬豊後二見ヶ浦大しめ縄張替え」(大分県佐伯市)である。



瀬戸内国際芸術祭の作品の一つ
草間彌生「赤かぼちゃ」と瀬戸内(香川県直島)

常の通勤・通学風景、長大橋や人工海浜からの景色、祭り、段々畑、商店街・市場、石切場、レンガ工場や美しい夜景を創出する工業地帯などの今日へと続く現代的風景』というように多様である。また、キーワードを拾ってみても「棚田・段々畑」「花を楽しめる農業景観」「ため池」「干拓」「カキ(牡蠣)関連」「商店街・市場」「塩関連」「工場・造船所」「灯台」「港湾」「橋梁」「道路」「寺社・仏閣」「展望台」「集落・町並み(含む街並み)」「石垣」「渡船」「行事・慣習・祭事」「堤防」「温泉」など実に様々である。ここからあぶり出されてくるのは「多様性」である。「身近な景観の多様さ」、これこそが、今回の情報をもとにして、浮かび上がってきた瀬戸内の身近な景観の特徴といえる。

元来、遣隋使、遣唐使の昔から、瀬戸内海は国内外へと通じる交流の道であった。多くの人々や物資が行き交う中に日常の生活があり、世代が交代し、時代が流れながら積み重ねられ、歴史が作られてきた。その中で文化が育まれ、そして今に繋がっている。

瀬戸内に残る身近な景観は、瀬戸内が持つ里山里海的で人の手によって維持されてきた自然環境や地勢の上で形成され、

- (i) 国内に留まらない人や物資の移動(海と陸の回廊)
- (ii) 産業活動(農漁業、鉱工業(石と塩)、温泉ほか)
- (iii) 戦争・災害(防災)と復興

などを背景に技術が進歩していくなかで人々の営みや生活から生み出されたものなのである。

それでは、ここで収集された情報を少し整理していきたい。

最も印象的なことは、林業に関連するものや瀬戸内国際芸術祭で創出された景観がなかったことである。今回収集されたもの以外にも身近な景観があるものと思われるが、この点は重要であろう。

このことを踏まえつつ、提供された身近な景観を俯瞰してみると、『古くからの景観を残す寺社仏閣、近世の雰囲気色が濃く残る港町や街並み、近代の軍事遺跡、渡船が風情を添える日



長浦毒ガス貯蔵庫跡(広島県大久野島)

(3) 人文景観とともにある持続可能な社会

今回、「景観保全に関する法制度と保全に向けた取り組み」では22件の情報が寄せられている。都市計画法、文化財保護法、景観法、地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（通称：歴史まちづくり法）、景観等の条例に基づくもののほか、「りんくう海道ブルーツーリズム事業」が寄せられた。いずれも地域の人たちの協力を得つつ、府や県、市町村が中心となって行ってきた取り組みの事例である。身近な景観が保全されるためには、まずもって対象となる景観の価値が地域で理解されて、共有されることが最も大切なのである。収集された事例は、まさに基盤となる取り組みであり、重要な意義を持っている。

ところで、人文景観を保全するうえで重要な点が2つある。それは、時代により景観の評価が変わる点と景観を保全するには努力が必要である点である。無くなるのは、その時代に生きている人から評価されなくなることが要因のひとつである。一方で身近な景観の維持は、その時代を生きる人たちがその価値を評価して、親しまれ愛されてきた地域の宝物を継承することであり、見える化された人々の記憶を次の世代へ継承することでもある⁴⁾。因島等がかつての景観を残そう頑張るのは、そこで今生きている人達にとって、目の前から記憶もろとも大切なものが消えようとしているからである。だから残そうとするのである。



因島除虫菊の父・村上勘兵衛翁之碑



重井西港斜面の馬神除虫菊畑と瀬戸内（広島県因島）



香川県三豊市詫間町の「フラワーパーク浦島」では休耕田を活用した花畑を地域が協働で維持していることをこの看板で伝えている。

他方、3.(1)にあるように、「景観を守る地域の過疎高齢化に伴うマンパワー不足が深刻」になっている現実がある。景観を維持していくためにはお金も人手も必要であり、そのための努力が必要なのである。

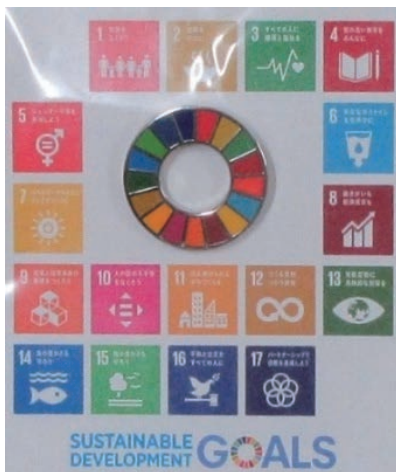
少子高齢化が進む、これからの日本を考えた時に何が大切になってくるのであろうか？ やはり、エネルギーなどの地産地消を基本としながら個々の地域内で経済がスムーズに回り、相互に交流する地域が連続して繋がり、それらの集合体が一体化していくことが大切なのではないか。その延長線上に世界が広がっている。そんな状況のなかで各地域の豊かさが増していき、住む人たち、ひとりひとりが光り輝いて生きている。個々の地域の宝物を他の地域の人たちが理解し、賛同者として何度も来てくれて家族のようになる。建物などは資産として積極的に活用されて、保全されていく。それが理想であろう。

近年、国立公園など様々な分野において多様な主体が取り組みに参加する、いわゆる「協働」のかたちが随所にみられる。最近では、棚田地域振興法が施行され、行政機関（都道府県・市町村）、

農業者、地域住民等が参加して地域協議会を結成し、棚田を中心として地域振興などに取り組み、それを関係府省庁と一緒に支援していく枠組みが構築されている。背景には、国はもちろん自治体において財政的に厳しいこともあるが、それ以上に、地域づくりの主体は、地域に住む人たちであるという考え方や理解が浸透してきた結果なのではないだろうか。

従って、これからは地域の知恵が試される時代となる。ハード整備型で地域づくりを進めていくことよりも、あるものや持っているものを活かす工夫も求められる発想がますます重要になってくる。そのためにも分野や専門が異なる人々が集うことには意義がある。加えて、保全のための資金をいかに得ていくのか？ これもまた重要なことであり、外から支援を得る「ふるさと納税」制度は大切なツールとして有効活用していくことが大切だ。いかに地域の外に仲間やリピーターを作っていくか、増えていくことで地域の就業の場が増える可能性がある。住民主体という点からはクラウドファンディングも積極的に活用したい。国の有形文化財に登録されている淡路島の春陽荘ではクラウドファンディングによって得られた資金も補改修に活用されたと聞く。

身近な景観の持続性は「個性」「つながり」「一体感」を強化していくことにより高まる。それぞれの個性ある景観がICTなどを活用しながら繋がり、瀬戸内で強固な一体感を醸し出すネットワークが出来れば、全体としてのストーリー性も高まり、来訪者を魅了して保全へと結びつき、持続性を高めていく。地域の誇りである景観が地域を輝かせ、地域の人たちを生き生きとさせる。地域の人たちが輝かないと地域は続かない。



SDGs ピンバッチ

2030年を目標年次としている持続可能な開発目標がある。SDGsである。17の目標と169のゴールから構成されている。ユニークなのは、達成するためのルールがなく、最終地点のみが決められているところである。最近、様々なところで取り上げられるようになった。写真のピンバッチは17の目標のアイコンの色を示している。映像などで付けている人の姿を、数多く見かけるようになった。11番目の目標は「住み続けられる街づくりを」であり、蟹江憲史は著書『SDGs（持続可能な開発目標）』の中でこの趣旨を「都市や人間の居住地をだれも排除せず安全かつレジリエントで持続可能にする」と解説している⁵⁾。この目標は、今住んでいる人たちの子どもや孫が、その地域に住みたくなって、命のバトンが次の世代へと受け継がれていくような持続可能な地域づくりに通ずる。グローバル化

の負の側面が見つめ直され、個性ある地域が連なる持続可能でしなやかな社会が築きあげられるためには、身近な景観の保全が要であるといえるだろう。

<引用・参考文献>

- 1) 白幡洋三郎(1996)：旅行ノススメ：中公新書，81
- 2) 星野佳路(2020)：旅行業界の風雲児が対峙する逆境：見えてきた7つのメガトレンド アフターコロナ：日経BPムック，102-103
- 3) 西田正憲(1999)：瀬戸内海の発見：中公新書，27，132-133，146ほか
- 4) 佐山浩ほか(2015)：瀬戸内海地域固有の景観資産の掘り起こしに関する調査研究（平成25年度福武財団瀬戸内海文化研究・活動支援），10
- 5) 蟹江憲史(2020)：SDGs（持続可能な開発目標）：中公新書，98-101